第２節　上之国館跡の現況と課題

１　位置と地形環境【第２図参照】

古地図を見ると、洲根子岬は大安在海岸から石崎に至る方面と、天の川流域とを分かつ日本海に大きく「突出する顕著な海角」として描かれている。現在は本町字大崎の西端の岬を指しているが、古くは大澗ノ崎までをも含む岬の総称であったようである。

花沢・洲崎・勝山の三館が立地する天の川河口部は、その洲根子岬を南西端に、北端は江差津花の岬によって画された、大きく南に湾入する入り江の最奥部に位置している。

水量豊かな清流の天の川はまた乱流の暴れ川で、現在は沖積平野の南西縁を西流して大澗湾に注いでいるが、幾度も洪水や氾濫を繰り返し、河口部や下流域の各処に蛇行の痕跡を残している。その支流の上ノ国目名川は、江差・厚沢部町界の分水嶺に発し、伏流水の湧き出る沼沢や谷地を各処に生み出し、南下して天の川河口部に合流する。

昭和23年(1948)の米軍撮影の航空写真を見ると、上ノ国目名川は川筋を大きく蛇行させ、洲崎館跡の南岸を洗うように廻っている流路が確認できる。その右岸には海岸に沿って砂丘列が発達し、砂丘によって被覆された砂州の尖端が天の川の潮口へと続く。

砂洲は、さまざまな形状に変幻しながら対岸の上ノ国市街地の至近に迫り、また逆に、河口部左岸の南縁から対岸に向かって延びることもあって、狭い潮口は砂堆によって河口閉塞をよく引き起こす。『福山秘府』(安永９年(1780))にみえる寛文５年(1665)の「松前年代記曰、春、彗星見。西部上國太平山鳴動、天河海口成陸」や、天和元年(1681)冬の「西部上國天河河口成陸」がそれである。

標高363.9mの独立丘のごとき大平山の山塊の中腹から天の川左岸に沿い、標高180m前後の八幡野丘陵が北西に向かって長く低平に延び、洲根子岬の急崖となって日本海に落ちているが、その丘陵から幾筋もの小流が谷を刻み、天の川や大澗湾に注いでいる。

花沢館跡は、天の川の河口から約800m上流左岸、八幡野丘陵の北東斜面の末端に位置する標高58mの舌状部を占地し、勝山館跡は八幡野丘陵から大澗湾に向けて流下する宮の沢川と寺の沢川によって開析された尾根部を人為的に削平して築かれている。一方、対岸の洲崎館跡は上ノ国目名川右岸を占地し、海抜約15mの砂丘列の南東に立地している。

それら三館跡は天の川河口部を三角に囲繞し、花沢館跡の頂上部からは天の川河口部や、上ノ国目名川の右岸に洲崎館跡を望見でき、勝山館跡の中央通路からは天の川河口部や洲崎館跡を間近に見下ろすことができる。一方、対岸の洲崎館跡からは花沢・勝山両館跡を一度に視野に捉えることができる。

河口部に古くは潟湖（ラグーン）があったと推されているが、河川が運搬する土砂による埋積が進んで縮退し、昔時の面影をわずかに残すにとどまる。

２　土地利用の状況と現況植生

１）花沢館跡【第３・４・５図参照】

指定面積は28,839.00㎡で三館のなかでもっとも狭小である。土地利用の状況を示した台帳地目別・所有別一覧を以下に掲げた。畑３筆は耕作放棄地で、山林にはトドマツが植栽されている。原野４筆のうち２筆が社寺有地で、指定面積の約67％を占めている。

現況の植生は、北西部が小～中径のイタヤカエデ・ミズナラが優占する広葉樹林で、南東部はイタヤカエデやミズナラにヤマグワ、ニセアカシア、ノリウツギなどが漠然と混生する広葉樹林となっている。これらの広葉樹に挟まれるかたちで、城址の頭頂部から等高線を貫いて北東に下降する幅10～20mの狭小な区域は、人工造成によると思われるササ地となっている。しかしながら、この区域では、本館跡の北東部を覆う上記の広葉樹林によって強い冬季の季節風が遮られるためか、すでに間伐適期を迎えたトドマツ、クロマツ針葉樹林や、ほぼ成木に近いエゾヤマザクラの林分もみられる。

第２図　天の川河口部関係図

その１　史跡上之国館跡　昭和23年撮影　米軍撮影航空写真（国土地理院発行）

その２　慶応２年(1866)頃　上ノ国絵図（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）

その３　史跡上之国館跡周辺　地形図
（明治29年製版・陸地測量部発行の北海道假製５万分の１地形図を拡大して転載）

その４　史跡上之国館跡周辺　地形図
（大正６年測図の大日本帝國陸地測量部発行の５万分の１地形図を拡大して転載）

地目別土地区分

地目別	畑	原野	山林	雑種地	計
花沢館跡	3	4	1	2	10
	3,791.00	20,347.00	664.00	4,037.00	28,839.00
	13.1	70.6	2.3	14.0	100.0

（上段：筆数、中段：面積（㎡）、下段：面積比（%））

所有別土地区分

所有別	国有地	市町村有地	社寺有地	民有地	計
花沢館跡	2	3	2	3	10
	4,037.00	1,254.00	19,295.00	4,253.00	28,839.00
	14.0	4.3	66.9	14.7	100.0

（上段：筆数、中段：面積（㎡）、下段：面積比（%））

なお、昭和30年代の国道228号改良工事でその舌状丘陵先端の一部が切り崩され、大手口は城館としての地形環境や景観をいまにとどめていない。

2）洲崎館跡【第6・7・8図参照】

指定面積は57,753.99㎡で、土地利用上の大きな特徴は館跡の北西に並ぶ砂丘列からの飛砂を防備するため造成された防風・飛砂防備保安林にある。その指定面積は約32,000㎡で、指定面積の約55.8％を占める。

指定地中央の町有地（字北村137－1）が大正11年に防風保安林として指定されたのが嚆矢で、戦後になっても防風や飛砂への対応のため、防風・飛砂防備保安林の指定区域は拡大を続け、保健保安林として兼種指定されている。

この館跡を広範囲に覆う保安林の現況植生は、イタヤカエデ・ギンドロ（ウラジロハコヤナギ）優占の広葉樹林とイタヤカエデ・オノエヤナギ優占の広葉樹林である。著しく矮生化した樹形から察するに、これらは日本海から吹く強い季節風によって健全な樹高成長が阻害されつつ、萌芽更新を繰り返しながら、かろうじて個体維持を保っているようである。

しかしながら、これらの後背に分布するクロマツ林やシラカンバ・エゾヤマザクラ混成林はおおむね通直かつ完満で健全な成長を遂げ、そこでの地域の人々の土地利用も多岐に亘っている。このことから、上述した矮生広葉樹林の前生樹帯としての気候緩和機能、もしくは飛砂防止機能には目をみはるものがある。規模は小さくとも、江差町の砂坂海岸林を彷彿とさせる。

林床を被覆するクマイザサが周辺部まで拡がるなど、館跡としての美観には、たしかにもとるものがあろう。しかし、この館跡の植生の今後のあり方については、くれぐれも慎重な取り扱いを要することは言うまでもない。

土地利用の状況を示した台帳地目別・所有別一覧を以下に掲げたが、指定地は国道沿いに連坦する住宅地に近接しているため宅地が多く、また、宅地の後背や町道沿いには蔬菜用の畑地が拡がり、館跡西端の崖下は海浜地となっている。

地目別土地区分

地目別	宅地	畑	原野	山林	墓地	保安林	公衆用道路	雑種地	計
洲崎館跡	13	10	6	3	2	7	3	7	51
	5,538.99	4,966.14	38,348.00	752.00	1,810.00	4,235.00	111.00	1,992.86	57,753.99
	9.6	8.6	66.4	1.3	3.1	7.3	0.2	3.5	100.0

（上段：筆数、中段：面積（㎡）、下段：面積比（%））

所有別土地区分

所有別	国有地	市町村有地	社寺有地	民有地	計
洲崎館跡	1	14	9	27	51
	437.00	34,663.77	9,204.90	13,448.32	57,753.99
	0.8	60.0	15.9	23.3	100.0

（上段：筆数、中段：面積（㎡）、下段：面積比（%））

北東部には北村地区が所有する墓域が２筆存在する。平成11年度に墓地用地が手狭になったため拡張した経緯があるが、指定後も現状変更申請手続きを経て墓地の建て替えが行われている。

指定地の南端を北村集落と向浜集落を連絡する町道向浜線（旧福山街道）が東西に走っている。その町道にほぼ直角に参道が北に延び、奥の境内地に砂館神社（道指定有形文化財）が鎮座している。

３）勝山館跡【第９・10・11図参照】

指定面積は353,923.98㎡と広大で、上之国館跡の全指定面積（440,516.97㎡）の約８割を占めている。土地利用の状況を示した台帳地目別・所有別一覧を以下に掲げたが、宅地は重要文化財旧笹浪家住宅付近に集中し、境内地は上ノ國八幡宮と上國寺のほか、夷王山神社が鎮座する夷王山山頂から中腹にかけて分布している。

畑地は、戦後まもない米軍撮影の航空写真に瞥見されるように、館跡の平坦面や寺の沢川の左岸、宮の沢川の右岸に分布しており、耕作地として開拓利用されていた。現在は耕作放棄地となっており、その大部分は上ノ国町が買い上げている。山林は原野に次いで多く、宮の沢川の左岸、上國寺の後背斜面、それに夷王山の北東斜面に分布している。

地目別土地区分

地目別	宅地	畑	牧場	原野	山林	境内地	公衆用道路	雑種地	計
勝山館跡	8	39	4	27	33	9	2	25	147
	1,073.87	48,859.11	25,402.00	91,187.00	88,342.00	37,917.00	1,350.00	59,793.00	353,923.98
	0.3	13.8	7.2	25.8	25.0	10.7	0.4	16.9	100.0

（上段：筆数、中段：面積（㎡）、下段：面積比（%））

所有別土地区分

所有別	国有地	市町村有地	社寺有地	民有地	計
勝山館跡	11	118	16	2	147
	40,003.00	256,074.14	54,290.84	3,556.00	353,923.98
	11.3	72.4	15.3	1.0	100.0

（上段：筆数、中段：面積（㎡）、下段：面積比（%））

現況は山林が約235,949㎡で全体の３分の２を占め、樹種は広葉樹のほか、スギやトドマツが多い。夷王山を中心とした北側斜面は原野化が進み、ススキが群生している。これらは放牧地としての土壌攪乱によって成立したササ草原の代償植生と考えられている。東側には600余基の夷王山墳墓群がほぼ６地区に亘って点在する。

また、夷王山周辺は強い冬の季節風が卓越するため、散生するカラマツやイチイは著しい風衝樹形を呈しており、このことから、樹林帯造成には不適切な立地環境にあることが知られる。その中にあって高木種としてクロマツだけがほぼ正常な樹形を保ちつつ成長している。強風域における海岸林造成のホープとしての面目躍如たるものがある。

元来、エゾヤマツツジの自生地として知られていたが、盗採によって打撃を受けたが、いまは比較的